

「小川島鯨見張所」

佐賀県唐津市

鯨を探すための陸上の施設である「山見」は、小川島だけでなく周辺の島や本土側にも配置されており、周辺の海域には斥候船(見張り船)も配されていた。この探鯨システムの本部が小川島地の山の山見(鯨見張所)であり、鯨の発見に努めるだけでなく、鯨が発見されると船に合図を出して指示する役目を担っていた。

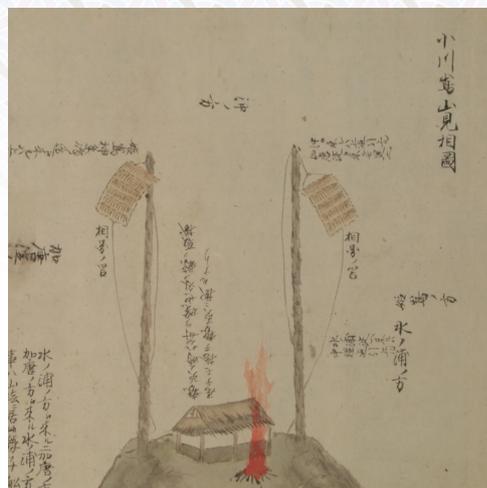
鯨を発見した他の山見や船は、見張所に旗や狼煙で合図を送り、見張所から待機している船団に対して鯨の種類や来る方向といった情報を発信していた。合図を確認すると、各船は一斉に鯨のいる海域に向かい、網船の待つ「網代」に鯨を追い込み、捕らえた。なお、大砲で鯨を撃つノルウェー式捕鯨が導入された明治末期以降も、陸上の山見を使った旧来の探鯨システムが戦後まで使われた。現在残っている見張所の建物はその当時(大正～昭和初期頃)のものである。

呼子の中尾家は江戸時代中期から明治初期にかけて、八代にわたり断続的に鯨組を経営した。鯨組にはハザシ(銚を投げる者)や水夫など600人ほどが雇われ、小川島に置かれた納屋場(鯨の解体・加工場)での従事者も含めると合計800人近くの人々が捕鯨に従事しており、捕鯨業は唐津藩の一大産業となっていた。

250年以上前に建てられた唐津市指定文化財「鯨組主旧中尾家住宅」からは、藩主を凌ぐともいわれた当時の中尾家の繁栄ぶりがうかがえる。このような規模で江戸時代の鯨組主の建物が現存していることは珍しく、大変貴重である。また、中尾鯨組では毎年漁期の後に呼子の龍昌院で鯨供養を行い、その霊を慰めていた。旧呼子町内には4基の鯨供養塔も残っており、人々の鯨への供養・感謝の心を

みることができる。

なお、江戸時代の小川島漁場での鯨組の活動は、「小児の弄鯨一件の巻」(「肥前国産物図考」中の1巻)や「小川島鯨鯨合戦」などの図説に詳しい。



小川島の山見「小児の弄鯨一件の巻」から
(佐賀県立名護屋城博物館蔵)



肥前国小河嶋鯨場絵図
(佐賀県立名護屋城博物館蔵)

みどころ



- 小川島祇園祭：一年間の大漁と無病息災を祈願して、毎年7月中旬に開催されるお祭り。顔に化粧を施した男たちが、かねや太鼓、笛の音色に合わせて山笠をひいて島内をめぐる。夜は島の全ての船が灯りをともし、港は幻想的な雰囲気を出す。